

近世文学における李白受容の一斑

熊 慧 蘇

はじめに

今まで李白に関する研究は盛んに行われてきたが、その多くは彼の詩と人生に関する研究であった。つまり、「李白の詩や人生とは何か」が主に追求されたのであり、日本文学にどのような影響し、その表現に何をもたらしたかという問題は、多くは研究されていないようである。その原因は、平安時代において李白が広く受容されていないことにある。平安朝の漢文・漢詩の受容状況を見ると、李白の詩文や名を挙げる作品は極めて少ない。ところが同じ唐の詩人である白居易の詩文は随所に見られる。

例えば、『千載佳句』には、白居易の句が五三五句あるのに対して、李白の句は僅か二句しかない。さらにその後の『和漢朗詠集』と『新撰朗詠集』には、李白の詩が一首もない。また、『源氏物語』は「長恨歌」を取り入れており、『枕草子』も「白氏文集」を多く引用している。だが、ともに李白との関わりは見られない。

他に、このようなこともある。『江談抄』第五の八に「李白は謫仙なり」という文が見られるが、続いてなんと「李白をもつて謫仙人と号くる由、文集に見ゆ」とある。なるほど、「李白は謫仙なり」という話も『白氏文集』によって伝えられたものである。

平安文学における李白の受容について、現在主に指摘されているのは、嵯峨天皇の詩に李白の影響が見られることと、空海と道真の詩に李白の詩との相似性があることなどである。⁽²⁾一方、「長干行」が『伊勢物語』の二十三段に用いられていることは仁平道明氏によってすでに指摘されている。⁽³⁾仁平氏はさらに『土佐日記』にも李白詩の翻案例が実際に存在すると断言している。しかし、仮にこれらの指摘すべてを認めたとしても、和歌・物語・日記などへの膨大な漢詩文引用の指摘に比べると、非常に少ないと言う他ない。

漢詩文を公的な文学とする平安朝において、中国の名詩人である李白の詩があまり受容されていないことは、不思議な事実である。それについて、大野実之助氏は「平安漢詩と李白」において、「李白の詩には歴史性が多分に含まれ難解な部分が多い」と指摘しており、⁽⁴⁾他面、陳安麗氏は李白が生前に作品集を纏めていないため、日本に伝わるのが難しいと論じている。⁽⁵⁾

このような現象は近世に入ると変化をしてきた。すなわち、『古文真宝』や『唐詩選』などによって、平安時代より李白の受容が広がった。漢詩壇で李白を高く評価するようになり、俳諧や歌集において李白の影響が見られ、仮名草子などにも李白の詩文や名を使うようになった。

しかし、さしあたり近世文学においては、従来、漢学者による李白の推賞がある一方、芭蕉や蕪村などの俳詩・文に与える影響が指摘されているが、李白受容の全体像とその特徴は未だ指摘されていないようである。

今回はまず近世において李白がどのように受容されたのか、その様相を列举し、近世文学における李白受容の特徴を示

そうと思う。そして、引用の多い「春夜宴桃李園序」に注目し、それがどのように各文学作品に引用されているのか分析し、この序がどのように解釈され、近世文学の中で再生されていくかを考えたいと思う。

一

近世初期に多くの中国の詩文関係書が和刻されたこともあって、詩文は徐々に愛好者を増やし、漢文学も広がってきた。『三体詩』『聯珠詩格』『古文新宝』などはたびたび版を重ねている。近世中期になると漢文学は近世文学の一分野として定着してきた。特に徂徠は中国明代の古文辞派の主張「文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐」を受け継いだ。南郭は盛唐詩を多く含む『唐詩選』を校刊し、それまで愛好されていた『三体詩』を退けて大流行した。このような背景で、李白の受容は近世以前より幅広くなり、李白に対する評価もより高くなってきた。

松下忠氏によると、石川丈山（一五八三—一六七二）は唐詩を好み、盛唐と中唐の詩を理想として、中でも李白と杜甫を非常に重んじている。彼は『北山紀聞』詩教卷一において、「盛唐の中にも其人の風体句法は替るべし。王維岑參韋蘇州等皆な名家なり。されども名人は古今に先ず李杜と云。李白は詩神杜は詩聖と云たそ」と評している。祇園南海（一六七六—一七五二）は李白を敬慕推重し、詩論の中にしばしば李白を引例している。彼が生前門人らに口授するところを、没後刊行した詩話『南海詩訣』（一七八七）詩法雅俗辨の中には、「相戒めて樂天が詩及び宋元の詩を見ることなかれ。其俗病を治すること他なし、唯深く李太白が詩及び岑參が詩、此二集を常に吟誦する時は、自然に俗病を免るべし」という文があり、李白の詩を俗病を治す妙薬としているのである。古賀侗庵（一七八八—一八四七）は『侗庵非詩話』（一八一四）に「盛唐太白少陵、足以雄視一代、凌厲千古」と賞賛している。

もちろん、李白の詩に擬したり、引用したりして作った作品も以前より多く見られる。たとえば、鳥山芝軒（一六五五

「一七二五」は李白の「月下独酌」に対し、「月下对酌」という題の詩を作った。その内容は下記の通りで、李白を冗談の相手にしているのである。

嫦娥為我致佳賓、引向樽前飲興數。堪笑青蓮老居士、強將独酌当三人。

また、南海も李白の「秋浦歌十七首」第十五中の句「白髮三千丈、緣愁似箇長」の意を逆にして、「剪除白髮三千丈、何処窮愁著箇長」（南海先生集、卷四）としたのである。

近世末の鈴木松塘はさらに、自分の詩の中に李白の「山中与幽人对酌」の結句をそのまま引用している（詩鈔卷下、送琴僧古岳帰紀山⁶）。

李白を慕うのは漢詩壇だけでなく、俳壇・歌壇でも李白を受け入れている。

芭蕉の俳号桃青は、李白の名を意識してつけたと指摘されている⁷。その句の中にも李白詩の影響が見られる。例えば、「月に坐しては空しき樽をかこち」（「寒夜辞」という句は、李白の「莫使金樽空对月」を擬していると思われる。その俳文「四山の瓢」にも、「飯顆山は老杜のすめる地にして、李白がたわぶれの句あり、素翁李白にかはりて、我貧を清くせんとす」という文が見られる。

また蕪村にも李白の影響が見られる。まず絵画では「醉李白図」や「李白觀瀑図」のような李白の人物画を描き、「春夜宴桃李園序」の文に「春夜桃李園図」を描いた。また、「春泥句集序」に、「詩家に李杜を貴ぶに論なし」と李白・杜甫に對する尊敬を認めている。そして、諸井康子氏によれば、発句の「茸狩や頭を挙げば峰の月」「心太さかしまに銀河三千尺」は、それぞれ李白の「挙頭望山月」「飛流直下三千尺、疑是銀河落九天」の句を踏まえている⁸。実は、蕪村の「心太さかしまに銀河三千尺」を先経ち、其角も「酒の瀑布冷麦の九天より落るならむ」という句がある⁹。

歌人にも李白の句をもって教訓とするものが見られる。

烏丸光榮（一六八九—一七四八）は『烏丸光榮歌道教訓』の中で虚構の真実について、「恋にも、愁ひにも、沈みぬる人の、思ひにほれていひ出たる、誠の至りなり。詩歌も、其意一なり。李白も『白髮三千丈』といへり」とその詩を例示している。

荻原宗固（一七〇三—一七八四）の『雲上歌訓』は近世堂上諸歌人の言説から、歌論の中心的理念に関係する条々を摘出し編集したものであるが、同じくこの句を挙げて次のようにいう。「又仰。誠、一通りと云ことを、押かへし尋る人もなければ、自問自答していはん。たとへば、『血の涙おちてぞ滝つ白川は』といふ類ひ、李白が『白髮三千丈』などいへる、偽のやう成ども、古人、情深き故、憂喜ともに、其情の深き処より、さやうに見ゆる也。今、酒に酔るもの、蠟燭をみて、此火、二にも三にもみゆるがごとし。憂にせまりては、白川の水も血のごとくみゆる也」¹⁰

詩壇・俳壇・歌壇においては、こうして李白の受容が広がってきたが、近世文学全体の中で白居易の受容と比べて見ると、やはり少ないといわざるをえない。

西鶴は実に多量な漢籍・漢詩を取り入れている。その引用例を数えてみると、三百六十もある。¹¹『史記』『漢書』などの史書、『論語』『莊子』などの思想書、『遊仙窟』『蒙求抄』などの故事伝説。そして、『詩経』『白氏文集』『和漢朗詠集』『三体詩』『唐詩選』『円機活法』などの詩集。そのうち漢詩の用例は全体のほぼ半分を占めている。中に白居易の詩を踏まえる用例は、『白氏文集』と『和漢朗詠集』を併せて三十七があり、名を挙げるところも七箇所がある。

しかしその中、李白の詩文を用いたのは、僅か四例である。

1. 『男色大鑑』巻四の三「待兼しは三年目の命」

李太白は古郷の妻を思ひやりての詩に。呉州如看月千里互相思と作れば。杜子美も又今宵武州月。閨中唯独看と心は同じ唐土人もかくは通へる事もあり。和朝の人も月見ばとちぎりて出し古郷の。人もや今宵袖ぬらすらんとよめり。

2. 『武道伝来記』巻八の三「播州の浦波皆返り討ち」

折節「雪中の夜梅」と言ふ題を置いて、燭を取て遊ぶ所に……

3. 『日本永代蔵』巻一の一「初午は乗つて来る仕合せ」

されば、「天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世は夢幻」といふ。

4. 『新可笑記』巻二の六「魂呼ばひ百日の楽しみ」

それ天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客。ここの仮寝の枕の夢、なほまた我が夢の覚め定まつて百日なり……

5. 『男色大鑑』巻一の五「墨絵につらき劔菱の紋」

離家の美花は人も折ずと。李太白もつくれり……

このうち、1の「呉州如看月千里互相思」は、『古文真宝』前集に収められている李白の詩「送張舎人之江東」中の二句である。2の「燭を取て遊ぶ所に」は李白の「春夜宴桃李園序」中の「古人秉燭夜遊。良有以也」からきたこともすでに指摘されている。これも『古文真宝』後集の中に見られる。そして、3と4はいうまでもなく、李白の「春夜宴桃李園序」の冒頭の句である。5の例はいずれの注釈にも「未考」「未詳」となっているが、小学館の新編日本古典文学全集中の暉峻康隆氏の注釈では、「この詩句は、現存の『李太白詩集』には見当らない。西鶴の思い違いか、フィクションであろう」と書かれている。『全唐詩』で検索したところも、見当たらなかったのである。そうなると、この句は李白のものではなく、ただ李白の名を借りているだけと考えられる。

つまり、5の句を除いて、いずれも『古文真宝』に見られるものである。四例すべて『古文真宝』にあることは興味深い事実である。

よく中国の歴史人物や物語を日本化して、脚本にする近松も、作品中に『国語』『莊子』『白氏文集』『東坡詩文集』など

の漢籍から多量な例を引いている。『白氏文集』だけでも三十四例が用いられている。⁽¹²⁾しかし、李白の詩文を引用したのはただの一箇所のみ、「王昭君」中の「今日漢宮人、明朝胡地妾」の二句である。

：なれし都は近けれど、ちさとをへだつる二重垣。今日はかんきうの人にして明朝胡地の妾と成。思ひを爰に籠鳥の、
したふ雲るははるかにて、近付物はさいご日の、かけも短、くれかゝり。⁽¹³⁾

これは『聖徳太子絵伝記』の三に、守屋に囚われた葛木島主の妻月益に当てて、王昭君の故事を引用した箇所である。物語からみると、敵の人質となった月益を、平和のため胡主と結婚する王昭君に喩えることは適当ではないが、自分の国から行きたくないところに閉じこめられる心情は、二人に共通している。その心情を簡単で分かりやすく読者に伝えるため、みんなが知っている李白のこの詩を借用したのである。

面白いことに、「王昭君」も『古文真宝』前集に収録されている。

周知のとおり、中世以来禅僧社会における中国文学受容は、盛んに行われていた。五山文学は、詩においては唐の李白や杜甫、宋の梅堯臣や蘇軾・黄庭堅および禅僧の集を規範としている。それによって、李白の詩が他の詩人たちとともにもてはやされ、それ以前より受容が広がってきた。『古文真宝』は室町時代以来五山の学僧に愛重され、詩文の教科書として学習されるようになった。近世では、すでに一般庶民の教科書となっていた。林望氏の「『古文真宝なる顔つき』——西鶴と芭蕉の基礎教養」によると、江戸時代で『古文真宝』の刊本はなんと三百種類近くもあったのである。⁽¹⁴⁾

一方、近世では『李太白文集』『李翰林集』など、いくつかの李白詩文集はすでに刊行されていた。西鶴と近松が、それらを読んだことがないとは考えにくい。しかし、庶民にとっては難しいものだったろう。少なくとも『古文真宝』のように、一般人の漢詩文の基礎教養とはなっていないはずだからである。西鶴らはあえて読者を意識して『古文真宝』中にある李白の詩文を引用しているのではないか。周知のように、『古文真宝』は中国名人の詩文を幅広く収録したものが、李白の

詩文は、そのうち約十二%を占めている。従って、知識階級は除いて、一般人は主に『古文真宝』を通して李白を読んでいたと推定できよう。

二

近世において李白の受容は以前より広げてきたが、その特徴はどうかであろうか。簡単に言くと、その中の二つは李白の人物に対する興味と、酒に結びつくイメージである。

よく知られていることだが、李白に関する逸話や伝説などは、中国ではその生前から伝わっていた。「謫仙人」は賀知章が李白に送った称号で、「斗酒百篇」は杜甫が書いた詩にある。宋に入ると、唐代における李白の仙人化を受け継ぎながら、さらに李白の倣岸な性格を賛美している。宋人の詩文の中にはよく李白の「力士脱靴、貴妃捧硯」の伝説が取り込まれている。中でも蘇軾の「李太白碑陰記」は、「太白使脱靴殿上、固己氣蓋天下矣。使之得志、必不肯附權倖以取容、其肯從君於昏乎」として、李白を最も褒め称えている。元明では李白の人物像を始め、李白と関わりのあるもの、例えば、李白を描いた画（李白の似顔絵、酒に酔う絵など）、李白の行ったところ（太白楼、采石磯など）を詩文にすることが多くなってきた。

日本で李白の人物に対する興味を多く示すのは、近世になってからのことである。

『膾余雜録』は承応二年（一六五三）に刊行された永田善斎著、五卷五冊の随筆である。その三の十一と五の三十には李白に関する二つのエピソードが書かれている。

三の十一は「鉄杵磨針」の伝説である。

淡海国有磨針山、相伝昔人登于茲、磨斧作針焉、故名。一曰、閱『劉氏鴻書』引『錦綉萬花谷』云、昔李白讀書於象

宜山中、未成棄去。過小溪、逢老媪方磨鉄杵。問之、曰、欲作碱。太白感其意、還卒業。媪自言姓武、今溪傍有武氏巖。五の三十は「李白騎鯨」の伝説である。

李白騎鯨。李太白狂士也。其謫夜郎、放情詩酒、不戚戚困窮。蓋其性本自豪放、非若有道之士、真能無入而不自得也。然其才華意氣、足蓋一時。故既没而人憐之。騎鯨之説、亦後世好事者為之、極怪誕、明者所不待辨。因閱此間及之爾。

出王陽⁽¹⁵⁾
明文選

『俳諧類船集』(一六七六)は高瀬梅盛が編集した俳諧の付合語集である。それは見出し語に対し関連する付合語をそれぞれ列挙したうえ、短文でその付合に必要な和漢の知識を集載する。中に李白に関する伝説をも取り入れている箇所がある。

沓……李白酔て高力士に沓ぬかせしと也

ここは「力士脱靴」の伝説。

月……李白於船中捉月溺死云々

ここは「李白捉月」の伝説による。

詩人の入江若水は享保十九年(一七三四)刊の『西山樵唱集』に「題五城洞巖老人所画清平調図」とする詩を載せる。

太白詩豪冠李唐、一斗百篇醒亦狂。天宝年間承聖旨、醉中高唱郢人章。

由来此曲韻尤勝、祕在梨園第一坊。自從采石捉明月、日夜江流正渺茫。

李白の「醉写清平調詞」の絵に付けた詩の中に、「斗酒百篇」「采石捉月」の伝説をも織り込んである。

次の年に刊行された徂徠の『徂徠集』巻六には、「李白觀瀑布」と題する詩がある。「匡廬瀑布三千尺、李白題詩映紫煙。知是騎鯨從此去、至今山色似青蓮」。李白の「望廬山瀑布」の詩境を想像したものであろうか、ここにも「李白騎鯨」の伝説を取り入れている。

『譬喻尽』は、松葉軒東井が一七八七年編成したもので、ことわざや慣用句などが江戸時代で最も多くに収められている。中に「李白一斗詩百篇 唐詩選二古詩出」の句がある。つまり、江戸中期には、李白「斗酒百篇」の逸話が慣用句のように、広く知られていたのである。

また、松浦静山は随筆『甲子夜話』（一八二二）において、『旧唐書』文苑伝や唐詩訓解注などから、李白が高力士に靴を脱がせた箇所を三つ挙げている。

以上は随筆、俳諧、漢詩、辞典類に見える李白であるが、それらは李白に関する中国の伝説を取り上げたものである。それぞれ李白の奇抜な人生に興味を寄せているといえよう。また、李白の詩によって、酒と酔いを結びつける傾向が多く見られることから、それが近世文学における一つの特徴的なイメージと見なすことができる。

寛永五年（一六二八）刊、安楽庵策伝作の『醒睡笑』は、愚人譚・失敗譚・風流譚などさまざまな笑話を分類別にした断本である。その中に、「李白詩、花間一壺酒、獨酌無相親」「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠。天子呼來不上船、自称臣是酒中仙。正李太白醉中、主上礼義亡却、此非無分別智境界乎」「唐李太白将進酒」云題、岑夫子。丹丘生。与君歌一曲、請君為我聽。鐘鼎玉帛不足貴、但願長醉不願醒。是佳酒朋立。若無青州從事、督郵風味可足。故東坡、薄、酒勝茶湯、又李白、白酒初熟山中歸。可謂醉亦文章、醒亦文章」「李白意在酒、則所見無非酒。漢水皆葡萄、罌麴藥、高台皆糟丘、白之胸襟亦大矣。又題邀月亭曰、拳酒勸明月、聽我歌声發」（卷五（上戸）¹⁶）などである。李白に関する事柄はここだけで、全部酒と関わる話である。

柳沢淇園の随筆『ひとりね』は、享保十年（一七二五）に成立したもので、話題は豊富で多岐にわたる。特に、三味線・琴・鼓などの音曲、煙草・酒・香などの嗜好品などに関するものが多い。その中に次のような文がある。

国史補に、酒に富平の石凍春あり。滎陽の土窟春あり。劍南の焼春有。すべて唐人酒をもつて春といふ。吳志をよみ

て見れば、烏程の酒に竹葉春あり。李白が詩にも「甕中百斛金陵春」などつくれり。津逮祕書などにも此説委しく見へたり。⁽¹⁷⁾

酒の名を「春」とする論拠の一つを、李白の詩に求めているのである。

平賀源内の談義本『根南志具佐』(二七六三)は、当時実際にあった歌舞伎役者荻野八重桐の溺死事件に取材した作品である。その巻四に、両国橋のにぎやかな風景を描いている。中にも酒売りの掛け声と酒を飲む様子が書かれるところがある。

田楽酒・諸白酒、汝陽が涎・李白が吐、劉伯倫は巾着の底をたき、猩々は焼石を吐出す。⁽¹⁸⁾

「李白が吐」というのは、李白が玄宗の前で泥酔して吐き、玄宗が自分のハンカチで李白の口を拭いた逸話である。泥酔した人を李白に喩えたのである。

蕪村の弟子の几董の自選の句集『井華集』(二七八七)に、「醉李白師走の市に見たりけり」という句がある。同じく酔い人を李白に喩えている。

田能村竹田の随筆『山中人饒舌』(一八三五)は、絵画の歴史、絵画の本質、作家やその作品に対する批判など多岐にわたっている。その中に、「傳神」ができず、物を通して内容を證す画家を批判している。

詩人詠物、画家寫生、同一機軸。形似稍易、傳神甚難。如孤山處士詠梅諸作、每字句盡為玉蕊珠花傳神也。時史采菊者、為陶靖節。對蓮者、為周濂溪。醉而倚瓮者、為李謫仙。笠而著屐者、為蘇玉局。是借他物而證其人。或除菊若蓮若瓮屐之類、則不知為誰也。⁽¹⁹⁾

酔って酒甕によりかかれるというのも、当時の李白に対する有力なイメージの一つである。

総じて、中国に伝わる李白の逸話や伝説に興味を示しただけでなく、広範な分野でそれを摂り入れたこと、酒にまつ

わる李白の人物像を日本風に作り上げたことが、近世文学における李白受容の二つの特徴と言えよう。

三

夫天地者、万物之逆旅、光陰者、百代之過客、而浮生若夢、為歡幾何、古人秉燭夜遊、良有以也、況陽春召我以煙

景、大塊假我以文章、會桃花之芳園、序天倫之樂事、群季俊秀皆為惠連、吾人詠歌獨慚康樂、幽賞未已高談轉清開瓊筵以坐花、飛羽觴而醉月、不有佳作、何伸雅懷、如詩不成、罰依金谷酒數。⁽²⁰⁾

これがその「春夜宴桃李園序」(以下「桃李園序」と略す)である。文の全体は人生の短さ、光陰の流れを感嘆する一方、兄弟団欒の楽しみを表している。文章は六朝の駢儷文体を用い、美しい春夜花園の宴会の楽しさが漂っている。「古文觀止」はこの文章を「発端数語、已見瀟灑風塵之外、而転落層次、語無泛設。幽懷逸趣、辞短韻長、讀之增人許多情思」と評論している。

傍線部の冒頭文は、時の流れが速く、よい時節が再び戻らないことを感嘆し、時に及んで行樂すべきと主張している。その「人」と「自然」、また「人生」に対する考え方には、老莊思想の影響が大きく見られ、それが当時李白自身の生き方をも示している。人生は短い、人は時空の中においては大海の一滴にすぎない。だが、それで悲觀することはない。大自然が我々に美しい景色を贈り物にしているのではないか。大自然の好意を背かないで、今宵大いに楽しもう。「将進酒」中の「人生得意須尽歡」もそれと同じ考え方である。その「天生我才必有用」というのも、李白の人生に対する自信であり、この序と共通している、前向きの生き方を示している。

李白の人生觀と文章の美しさに傾倒したのか、この序を踏まえた作品がいくつか見られる。まず、寛永二十年(一六四三)刊の『心友記』に、「桃李園序」の冒頭文を引用している。そして、『俳諧類船集』(一六七六)には、末段の「飛羽觴

而醉月。不有佳作、何伸雅懷」をもって「酒盛」の例として挙げてある。また、同じ一六八八年に刊行した西鶴の『日本永代蔵』『新可笑記』の中、三千風の『日本行脚文集』（一六九〇）巻の三、芭蕉の『おくのほそ道』（一六九四）の冒頭の句がこの文を踏襲していることはよく知られている。さらに、秋成もこの文章に擬して、「応雲林院医伯之需擬李太白春夜宴桃李園序」（一八〇〇）という文章を書いたのである。ほかに、恋川春町は『金々先生栄花夢』に「浮生若夢、為歡幾何」を引用しており、蕪村は「春泥句集序」に『類船集』と同じ部分を踏まえている。今回は冒頭文を援用する作品のみ取上げることにした。

なぜ近世の文人たちはこの文章、特に冒頭文を好んで、自分のものにしようとしているのか。またそれは彼らの作品の中でどんな役割を果たしているのか。さらに、それによって作者はどんな意図を読者に伝えようとしているのか。以下、冒頭文を援用する作品を分析しながら考えていきたい。

1、『心友記』

『心友記』は上下二巻の衆道論書である。その作者は明らかでないが、おそらく「はかなき此世」から仏門に帰依した隠遁者であろう。作者は上巻で衆道における情のあり方を説き、情がないために家を傾け、命を危うくすることを、唐の幽信、日本の日野少将則時の例話をあげて説き、更に衆道のよき例として奥州の美少年重光と景正の一話をあげている。ここで強調しているのは人と人の間の「情」である。下巻では情の受け方として、放逸心・中灯心・無生心・六道心・大中灯心・捨親心・門音心という様々な相を説き、次に十二歳から二十歳までの衆道を段階的に、三年ずつ主童道・殊道・終道として位置付け、仏法を中心として説く。強調されるのは若衆の「情」と「義理」である。「桃李園序」の引用は文章の最後、下巻の終わりに近いところにある。

その上老少不定、眼前なり。今世ほど、刹那の住家はなし。さればこそ李大白も、「天地は万物の逆、マ光陰は百代の過

客、浮世は夢の如し。喜びをなす事幾ばくぞや」といひ置きけり。⁽²¹⁾

冒頭の三句が引用されている。ここで、「浮生」を「浮世」に変えた意味について、述べておきたい。「浮生」というのは、「人生の定まらないこと」もしくは「はかない人生」であり、『莊子・刻意』の「其生若浮、其死若休（その生けるは浮かべるがごとく、その死せるは休するがごとし）」の句からきたものである。「浮生若夢」というのも万物の変易を夢のようなものとする道教の思想に基づくものである。それに対して、「浮世」は元来「定まらない人の世、はかないこの世」といい、漢語の「浮世」と仏教思想から出た「憂き世」とが融合した意で使われている。簡単に言うと、「浮生」は道教思想の「はかない人生」を指し、「浮世」は仏教思想の「定まらない人の世」を指す。『文明本節用集』には、「浮生」「浮世」がともに載るが、「浮生」には李白の「浮生若夢、為歡幾何。古人秉燭夜遊、良有以也」の句を挙げてある。つまり、室町中期では「浮生若夢」の解釈であった。『心友記』は人生無常・因果応報の仏教思想をもって全文を貫いているため、道教的な「浮生」を仏教的な「浮世」に変えたのであろう。

作者は李白の句を援用することによって、人生無常の仏教思想を強調し、貪欲などの罪を戒めようとしているのである。一瞥、李白における、時に及んで行樂すべしという趣旨が見られないが、文章の全体を見ると、実はそうでもない。作者は「一期は仮の住家、万事は夢の如し」といいながら、若衆の「情」と「義理」を強調している。しかし、衆道の本質は現世を楽しむことにあるということなので、李白の人生観を軸として導入しつつ、衆道の存在意義を認めている。

2、『日本永代蔵』

巻一の一「初午は乗つて来る仕合せ」に、李白の「桃李園序」を引用している。

この話はまず、町人にとっての金銀の重要性、儉約・家業精励・健康の必要を説く。続いて、一年倍返して銭を貸す水間寺の風習を紹介する。そして、水間寺から銭一貫を借りた江戸の商人網屋は、縁起のいい銭と称してそれを漁師たちに

貸し付けてもうけ、十三年後には、八千九十二貫に増やして、江戸から東海道を通し馬で運び、寺に返したことを語る。最後、水間寺では、後々の語り草にと、その金で多宝塔を建立したことで話を終える。

「天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世は夢幻」は、この話の冒頭の一節に置かれている。

天道言はずして国土に恵みふかし。¹人は実あつて偽りおほし。その心は本虚にして、物に應じて跡なし。²……人間、長くみれば朝をしらず、短くおもへば夕におどろく。されば、「天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世は夢幻」³といふ。時の間の煙、死すれば、何ぞ金銀瓦石にはおとれり。黄泉の用には立ちがたし。しかりといへども、残して子孫のためとはなりぬ。⁽²²⁾

もともと『日本永代蔵』巻一の一におかれるこの話は、全篇の総序であるだけに、西鶴の町人の経済生活に対する考え方がよく表れている。冒頭部分に李白の句を引用することには、作品全体に関わる大きな意味があるだろう。

実はこの書き出し自体すでに明らかのように、『古文真宝』中の文である。傍線1は『古文真宝』後集にある王元之の「待漏院記」中の「天道不言而品物亨」の翻案、傍線2は同じく後集にある程正叔の「視箴」中の「心兮本虚、応物無跡」の句の引用である。傍線3で分かるように、ここも『心友記』と同様、「浮生」を「浮世」に変えてある。しかし、この「浮世」は、『心友記』の「定まりない人の世」と違って、浅井了意の『浮世物語』(一六六一)以来の享樂生活を中心とする「浮世」を指しているのである。はかない人生を享樂の浮世に替えることで、金銭の大切さが浮き彫りになる。つまり、この世では何よりも銀が一番頼りとなる、たしかな物である。これは金銭をたよりにする町人の世界である。冒頭文で当時大流行していた『古文真宝』を多用することは、広く知られていることをマクラに振って、話を合理的に裏付けようとする西鶴の一種の書き方であろう。

『日本永代蔵』の話は、経済小説の代表作であり、全部金銭と人間に関わるものである。知恵を絞って大金持になるか、

遊びの果てに落ちぶれるかの話である。このような町人盛衰記を通して、致富道の教訓を説く。「永代蔵」という書名も家の繁昌とともに、将来永く保たれる意味で付けられた。作品全体を通して考えると、冒頭の一節はやはり全体の序文ともいべきものである。享樂の浮世うきよを安穩に過ごすには、金銭と健康を大切にして保っていくべきなのだ。

このように見てみると、作者の「桃李園序」の引用は、そこに現れる「時に及んで行樂すべし」の観点と一致しているのではないか。

3、『新可笑記』

『新可笑記』卷二の六「魂呼ばひ百日の楽しみ」にも「桃李園序」を引用している。

されども百日の経つ事安し。長命を祈らんと、国中の諸神に願状をこめられ、この事一子に語りかねしが、その身の心得にもなりぬべきと、とかくは言ひ聞かせけるに、この一子覚悟して、「それ天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客。ここの仮寝の枕の夢、なほまた我が夢の覚め定まつて百日なり。世の思ひ出に楽しみを極め、一日一年に遊び、春の花を秋見る事の細工に咲かせ、淫酒美食に昼夜を明かし、貧者を憐れみ、寺社を建立し、この上何か思ひ残じ」と。次第に日を折りて天命を待ちしに……⁽²³⁾

この話のおおよそは次の通り。

昔、するがの国の富商が息子に家督を譲り、武家方と縁組みをして嫁を迎えることになった。ところがある日、息子は将棋に熱中したまま頓死する。陰陽師に頼んで蘇生させたが、余命は百日と言われた。娘は嫁ぐつもりでいたが、男の家から離縁状が届いたので、悲しんで部屋に閉じこもった。百日目の夕方、男の家では安倍川に船を浮かべ、鳴り物の芸人をそろえて、船中酒に乱れていたが、折から息子を呼ぶ声が出て、ついに息が絶えた。娘は尼になり、菩提を弔った。

本文から分かるように、「天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客」を言ったのは、蘇生した息子である。「ここの仮寝の

枕の夢」は「浮生若夢」を踏まえた言い方である。後百日だけの命だと知らされた息子は、恐怖や不安など一切なく、生きていられる時間を十分利用して、世を楽しむ覚悟をしている。ここは李白の本意とうまく噛み合わせている。ただし、李白が人生を壮大な時空の中において発想し、感嘆したことを、西鶴は決められた時間に限定して、人生のはかなさをより身近な現実とする。ここもまた西鶴は李白の名言をもって主人公の発言に説得力を与えようとしているのである。

4、『日本行脚文集』

俳人の大淀三千風も同じく李白のこの句を引用している。元禄三年（一六九〇）刊の俳諧紀行『日本行脚文集』の巻の三に、次のような文章が見られる。

天地は、万物の逆旅、光陰は、百代の過客、予も其の独にかずらへて、虚無の外駅あれいでに生出し、身をありわうとしもはあらざれど、只四時の余波しひなに倡なはれ、東にちり、西にあふる。時しも四陽みなづき笠風に帆して、わがまだしらぬひの、蚩やどいざよふかた居り、

傍線部は李白の句をそのまま引用しているが、同じ趣向で書かれた箇所は外にもある。

…元来大本不昧の神心は、光陰旅客ひじりたまの聖魂ひじりたまなれば、かならず舍やどる器屋うつはやのなきにしもあらざらめやも……（巻の一）

…されば、万物順逆旅の問丸として、百代過客の送り荷物を漏らさず、時の相場に見合せ、上中下のけぢめなく、仕切帖を出し給ふ、愚昧も此の仕合よしにすぎり……⁽²⁴⁾（巻の二）

このように三千風は「万物順逆旅」や「光陰旅客」の語を好んで使う。親の反対を押し切って行脚を選んだ彼は、自ら人生を旅と結びつけたのである。旅路に感じさせられたのは宇宙と自然の広大さであろうか、自分の人生はその中に漂泊しているかに感じた。

『日本行脚文集』の自序に、「さる事あらむ五十、而知天命の頃も過ぎぬ、妻子もなく、爵禄の望もなし、かくて世に住

まれずば、住まであらむとやおもふらん、莞爾かな」という文がある。元禄二年この序を書いた三千風は、すでに五十歳を過ぎていた。人生の大半を過ごしたのに、「妻子もなく、爵禄の望もなし」、まことに人生は夢の如くである。しかし彼は、「天を笠にかぶり、地に鼻緒上げて、起念生滅の畔塘を平地し、自他の境藩をやぶり、野平等の大道にあそばめや、萬物吾体なり、人みな兄弟なり」として、決して人生ははかないと思っっているわけではなく、むしろ前向きの姿勢を示している。また、その文の発想と人生観には、李白と共通する部分が多く見受けられる。

5、『おくのほそ道』

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず。⁽²⁵⁾

周知のように、「桃李園序」を引用についてもっとも多く論じられたのは、『おくのほそ道』のこの冒頭である。しかし、ここは前の四例と異なり、そのままの引用ではなく、傍線部のように芭蕉自身の言葉で書き換えられている。

月日は永遠に旅を続けて行く旅人であり、来ては去り去っては来る年年も、また同じように旅人である。芭蕉は李白の句を変形した上で、自分の文章の出だしにして、次の旅のことを引き出している。李白の句を文章の導入にすることによって、旅と人生に対する思いを示している。

これについて、すでに多くの先行研究があるので、ここで二点ほど挙げることにする。

大畑健治氏は『おくのほそ道』と李白の詩』において、『ほそ道』冒頭文の典拠である李白詩は《引用》されたものでなく、俳諧的手法によって《踏襲》されたものである」と指摘している。そして氏は、「李白が時間を軸に旅から浮世へと詩想を廻らせたのに対し、芭蕉は旅を軸にして時間と生涯を『浮世Ⅱ旅』の中で捉えている」と論じている。⁽²⁶⁾

また、小林孔氏は『おくのほそ道』の意図⁽²⁷⁾において、「桃李園序」の引用の意図は『無常迅速』の理念を媒介として、『笈の小文』での風雅論の主張を、さらに実践に移そうとした表明であった」といい、「天地自然の流転の摂理にしたがう」のであると説く。

6、『藤篋冊子』

『藤篋冊子』巻五にある「応雲林院医伯之需擬李太白春夜宴桃李園序」は、秋成が寛政十二年（一八〇〇）に書いたものである。秋成は中国の白話小説を多く翻案したことで知られているが、これも李白の「春夜宴桃李園序」の趣意・構成を模倣している。彼はその中の一話「故郷倣韓退之送李愿帰盤谷序」の中でこう述べている。

前には太白の春夜宴を、国ぶりにかいあらためて贈られしを、世に珍らかに思えて蔵めたる。⁽²⁸⁾（『藤篋冊子』巻五）

しかし、文中に李白の句の意味を自分の解釈で書き換えたものが見られるが、原文そのままの引用はない。

やよひの望の夜ころ、かすみながらに、夕かけて月いと花やかにさしのぼりて、庭の桜が枝に先かゝれる影の、花に色をあそらふは、似る物もなくあはれ也。人々此木のもとにおりゐて、酒くみあそぶ。あるじの翁いへる。「月日は箭を射るにたとへ、人の命はゆく水の跡なきに云も、こよひや引てはなたぬほど、瀬によどむひまといはばいかに。さはいたづらにながめんやは。花の思はんをやさしみたまへ」とて、かはらけをすゝめ、筆硯さゝげいでて、物求め顔なり。

（中略）

あるじいとう酔ずゝみして、「人々の詞の花は、木末も色なくぞ見ゆ。風さそはねばちりもはじめず。月もあかときかけては、春の夜みじかくもあらじ。酒の泉猶尽ぬぞ」とて、ほときはうしとり、声いとたからかなり。

この酒をかみてたゝへし壺の中に、長き月日は有と社きけ、

物らしいはぬ人々は、おのがじ、酌つゝ、「御罰いたうかうむりぬ」といひてなん。³(29)

傍線1の句は、李白の「光陰者、百代之過客也。而浮生若夢」の意味に沿ったものである。中国には時の流れの速さを喩えることわざ「光陰似箭、日月如梭」がある。秋成はこれも合わせ踏まえて速く過ぎ去る光陰を箭に喩えている。その後の傍線2は「秉燭夜遊」の翻案である。また、最後の傍線3の文は、李白の結句、「如詩不成、罰依金谷酒斗数」からきたものである。

原拠と明らかに異なっているのは、李白の文章は題の通り「序」であるのに対し、秋成の文章は、宴会進行の様子まで描いていることである。また、中に歌を五句詠み込み、原拠の桃の花を桜にしている。さらに、箭の如く過ぎ行く良宵を惜しんで、「や引てはなため」「瀬によどむひま」のような具体的な描写によって、李白の時に及んで行楽する気持を一層強調している。また、翻案によって、原作を物語化した。

以上の六例は文体・内容から見てそれぞれだが、「桃李園序」の冒頭文を引用する（踏まえる）ことでは共通している。また、人生や旅に対する観点は、いずれも人生を大切にすることで李白と共通している。このように、「桃李園序」を多く援用することは、近世における李白受容のもう一つの特徴である。

おわりに

近世においては、『古文真宝』や『唐詩選』の流行によって、李白の詩が近世以前より広く読まれるようになり、受容の範囲も各分野に及び、幅広くなっている。同時に、李白の詩と人物についての評価が高くなり、李白の名や句を借りて教訓や論拠とするようになる。

その特徴としては、第一に、その波乱万丈の人生を表わすさまざまな逸話や伝説に興味を持つこと。第二に、酒にまつ

わる李白像を作り上げたこと。第三は、「春夜宴桃李園序」が大変歓迎されていること、この二つである。

第一と第二は中国における李白の受容史に大きく影響されていると思う。特に中国の詩話などの影響が考えられる。ただし、中国では、彼の波瀾万丈の人生と飄逸な詩、洒脱な人生観を中心としている。そのさまざまな逸話や伝説なども、李白の飄逸な才能、豪放な性格と権力者に屈しない精神を賛美するものとして伝えられてきたのである。それは日本人にとっては、かならずしも理解しやすいことではない。優雅な生活を送る平安貴族にとって、李白の不遇な人生は共感し難いだろうし、近世の一般人の理解もそのうわべに止まる。従って、特徴の第一と第二は、李白の外面的なものをそのまま受け入れたといえよう。

一方、「春夜宴桃李園序」の冒頭文を踏まえた作者の大半は、近世前期に集中していることは興味深い事実である。そこから、近世前期における中国文学・中国思想の影響とその受容姿勢の一斑がうかがえると思う。また、文章の全体に関わったのは中期の秋成のみである。この序に対する捉え方は時期によって変ってきたのかは、今回の調査では断言できない。この問題とそれに関わる特定の作品に偏りを持つことの原因について、今後の研究の中で説明して行きたい。さらに、中国詩話の近世文学に与えた影響、あるいは中国詩人受容の全体における李白の位置付けについても、あらためて検討を加えたい。

〔注〕

(1) 小島憲之『上代日本文学与中国文学——出典論を中心とする比較文学的考察——(下)』第七篇第二章「平安初期に於ける詩」

参照 塙書房 一九七二・一〇再版

(2) 大野実之助「平安漢詩と李白」『国文学研究』第9・10輯I 早稲田大学国文学会 一九五四・一二

(3) 仁平道明『伊勢物語』二十三段と李白「長干行」『文芸研究』第100集 一九八二・五

- (4) 同2
- (5) 陳安麗『枕草子』と漢籍——白居易・李白の受容を巡って——『日本文芸学』第33号 日本文芸学会 一九九六・一二
- (6) 松下忠『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその摂取——』(明治書院 一九七二・一一再版)による。
- (7) 山下一海『李白対松尾芭蕉的影響』中日李白研究会論文集 馬鞍山市李白研究会編 一九八六・一〇
- (8) 諸井康子『かな書の詩人』考——蕪村発句に及ぼした陶淵明・李白・杜甫・王維の影響——『山辺道』第18号 天理大学国語国文学会 一九七四・三
- (9) 石川八朗等編『宝井其角全集』編者篇にある『五元集』による。勉誠社 一九九四・二一
- (10) 両文とも『近世歌文集上』(岩波書店 新日本古典文学大系67集 一九九六・四)による。
- (11) 由井長太郎編著『西鶴文芸詞章の典故集成』(角川書店 一九九四・九)による。
- (12) 上田萬年・樋口慶千代『近松語彙』富山房 一九三〇・五
- (13) 近松全集刊行会編『近松全集』第10巻 岩波書店 一九八九・二一
- (14) 林望『書誌学の回廊』日本経済新聞社 一九九五・七
- (15) 内閣文庫所蔵承応二年刊本による。句読点は筆者が施したもの。
- (16) 武藤禎夫・岡雅彦編『嘶本大系』第二巻 東京堂出版 一九七六・二一
- (17) 中村幸彦校注『ひとりね』(『近世随想集』日本古典文学大系96集 岩波書店 一九七三・九 第五刷)による。
- (18) 中村幸彦校注『風来山人集』日本古典文学大系55集 岩波書店 一九七三・四 第八刷
- (19) 麻生磯次校注『山中人饒舌』(『近世随想集』日本古典文学大系96集 岩波書店 一九七三・九 第五刷)による。
- (20) 『漢籍国字解全書』第十一巻古文真宝後集 早稲田大学編輯部編 早稲田大学出版社 一九二二・二一
- (21) 野間光辰校注『近世色道論』日本思想大系60集 岩波書店 一九七六・八
- (22) 谷脇理史校注『日本永代蔵』(『井原西鶴集3』)新編日本古典文学全集 小学館 一九九六・一二)による。
- (23) 広嶋進校注『新可笑記』(『井原西鶴集4』)新編日本古典文学全集 小学館 二〇〇〇・八)による。
- (24) 佐藤飯人校訂『俳諧紀行全集』俳諧文庫第二四編 東京博文館蔵版 一九一三・一〇 三版
- (25) 井本農一・久富哲雄校注『おくのほそ道』(『松尾芭蕉集2』)新編日本古典文学全集 小学館 一九九七・九)による。

- (26) 大畑健治『『おくのほそ道』と李白詩——冒頭文における踏襲方法——』『日本文学』Vol.36-8 日本文学協会 一九八七・八
- (27) 小林孔『『おくのほそ道』の意図——冒頭の李白詩引用を巡って——』『立命館文学』第55号 立命館大学人文学会 一九九〇・三
- (28) 中村博保校注『近世歌文集下』新日本古典文学大系68集 岩波書店 一九九七・八
- (29) 同28

(この論文は第二十回和漢比較文学学会大会(二〇〇一年九月二三日、於相模女子大学)での口頭発表に基づいたものである。)